

● 小俣ラポー 日登美 特定准教授

Hitomi OMATA RAPPO (Associate Professor)

研究課題: 「黄色」聖人の誕生とヨーロッパにおける人種論の形成

—近世から近代にかけてのカトリック文化圏における日本人像—
(The birth of the Japanese saints and race: A survey of the image of Japan from the modern to contemporary European mindset)

専門分野: 歴史学 (History)

受入先部局: 人文科学研究所 (Institute for Research in Humanities)

前職の機関名: 京都大学大学院文学研究科

(Graduate School of Letters, Kyoto University)



日本は近代に国際社会に向かって本格的に開かれる前に、西欧の価値体系に取り込まれることで、すでに西欧社会に一定の評判を作り上げていた。その価値体系とは、キリスト教文化圏における聖人信仰で、他者である日本(人)も聖性を伴う信仰の模範として受容されていた。大航海時代に入った16世紀、人やモノだけでなく思想や宗教もグローバルに移動し、日本にもキリスト教信仰が伝えられたことは良く知られている。その教えは数十年普及し隆盛したものの、16世紀末以降、日本でキリスト教が禁じられ、信者や宣教師が取り締まりの対象になる中で一部は処刑され、信仰を模範的に全うした英雄、すなわち殉教者とみなされるようになった。彼らの事跡は、ヨーロッパの伝統的なレトリックに倣って多様な形で記録され、西欧においてその存在が法的に位置づけられただけでなく、文学・美術作品の対象となることで、そのイメージは増幅していった。こうした一連のイメージが、近世から近代にかけて西欧においてどのように変遷したかを検証していく。

In 1627, Pope Urban VIII beatified twenty-six martyrs who had been crucified thirty years earlier in Nagasaki, Japan. This beatification was exceptional, not merely for its sheer speed, but also because these were the first martyrs so blessed from new missionary territories. In permitting their veneration within the Franciscan and Jesuit orders, the Church not only recognized the value of their sacrifice, but also confirmed a certain view of Japan as the land of martyrs. This book recreates the process that led to this formation, and the diffusion of such rhetoric on the Japanese martyrs in Europe. In doing so, it showcases a double perspective (“à parts égales”), built on the rigorous analysis of both European and Japanese sources. Integrating such stories within a broader historical and historiographical perspective, it clarifies the impact of the term “martyrdom” in the descriptions of Japan in early modern Europe. It demonstrates how the missionary orders and the Church came to promote the martyrs of Japan, the ideological implications of this newfound recognition, as well as the worldview to which this spreading discourse gave birth. Later, the rhetoric of Japan as the land of martyrs would be amplified and diffused all over the Catholic world. Such “reflections,” in iconography, literature, or even theater, produced an “imaginary Japan,” a land of heroic martyrs, tyrants, cruel executioners, or converted princes, which would haunt the entire modern period.

西欧の価値体系に取り込まれた日本人

カトリック教会が長い伝統の中で形成させていった列福・列聖の制度は、キリスト教の信者の中から、模範的信仰を持ち亡くなった人々の聖性を公認することで、かれらが信者の崇敬対象となることを許可する仕組みである。この制度は古代末期から中世にかけて発展し、対抗宗教改革期の1600年前後には、現代のシステムに通じる「列福→列聖」の2段階の聖性検証方法

が設けられた。その後、17世紀を通じて制度として洗練され18世紀半ばに現代に通じる形となった。この制度は、地域的な名声を戴く個人の聖性を、中央のバチカン教皇庁が精査する仕組みで、地域的な信仰隆盛に対する中央集権的コントロールを可能にし、国境や地域の垣根を超えて、教会の影響力と権威を広く示すための手段ともなっていった。

日本の殉教者

日本からは、1549年にカトリックキリスト教が伝道され始めた直後から、信仰を死守して亡くなる人々を輩出したが、その一部がヨーロッパで正統な殉教者とみなされ、その中でも1597年に磔刑にされた長崎の26殉教者は、死後僅か30年後の1627年にヨーロッパで列福の対象となった。かれらの聖性をさらに上の次元で認めさせようとする動きは、日本が諸外国との国交を限定的にした「鎖国」期においても、ヨーロッパの近世を通じて、日本の為政者の直接的な関与なしに継続された。このような過程が進められた結果、日本の殉教者が、聖人伝の一つの文学ジャンルにおいて類型化されたナラティブとしてヨーロッパの各言語で継承され、日本の殉教者は頻繁な図像化の対象となり、また演劇作品のモチーフとなって、その聖性がカトリック文化圏において広く周知されることになった。こうしたヨーロッパで醸成された日本観のヨーロッパにおける受容と浸透の到達点が、明治維新の直前1862年におこなわれた上記26殉教者の列聖と、近世日本の殉教者の1867年の大量列福である。これらの過程では、日本人や日本の為政者が一切の主導権を持たず、ヨーロッパの教会関係者が独自に聖性の検証を蓄積させた結果、この成果が達成された。カトリック文化圏における列福と列聖の重みを鑑みると、西欧キリスト教文化圏における日本のイメージを決定づけた評価として、日本殉教者の聖性の公認は、日本(人)観の史の変遷を分析する上で格好の題材である。

近世から近代以降の殉教者の可視化

聖者は、信仰の模範者であり、もともと人間であるがために、カトリック信者にとっては伝統的に親近感を持てる崇敬対象として機能してきた。そのため、従来カトリック教会で崇敬対象として認められ普及していた聖人は、ヨーロッパ人が主体であった。日本人殉教者の場合、ヨーロッパの同時代の他の聖人と同様に描かれ、見えていたはずの身体的な差異は不可視化され受容された。19世紀に入り黒船が来航し、安政五カ国条約が締結された結果、日本が再びヨーロッパ諸国からキリスト教宣教の対象地と目されるようになり、日本(人)は実態を伴う存在へと変化していった。おりしも時代は人種のパラダイムが「科学」の体裁をと

りながら出現し、また「黄色」という肌の色に日本人が当てはめられた。この文脈で、前近代的な日本人殉教者の聖性が、近代にかけてどのように変化したのかも追究していく。

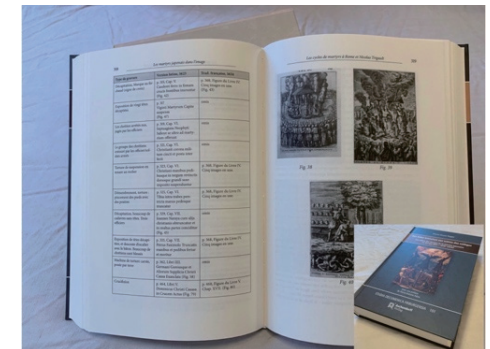


図1 近著(単著) [参考文献2].

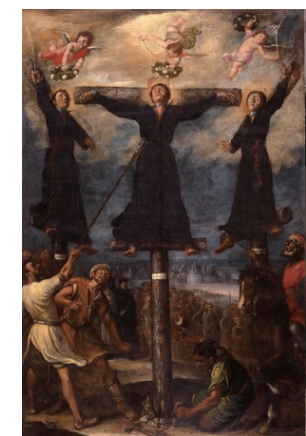


図2 バレンシア美術館蔵の日本人殉教者図(17世紀).

参考文献

- [1] Hitomi Omata Rappo, “Japanese Martyrs in French Jesuit Drama (late seventeenth–early eighteenth century). Between Violence and Bienséance”, IN: *Japan on the Jesuit Stage*, edited by Haruka Oba et al. (eds), Brill, 2021: 87-131.
- [2] Hitomi Omata Rappo, *Des Indes lointaines aux scènes des collèges: Les reflets des martyrs de la mission japonaise en Europe* [From the Distant Indies to the Scenes of Colleges: the Reflections of the Japanese Martyrs in Europe (16th - 18th century)], Aschendorff, 2020.
- [3] 小俣ラポー日登美「日本の「殉教」とグローバル・ヒストリー: 日本が西欧の歴史に内在化する時」日仏東洋学会『通信』42号, 2019: 33-82.
- [4] Hitomi Omata Rappo, “How to make « colored » Japanese Counter-Reformation Saints - a study of an iconographic anomaly”, IN: *Journal of Early Modern Christianity* 2017; 4(2): 195-225.